

2018年のエジプト考古学研究所の調査・研究について

吉村作治*¹・黒河内宏昌*²・矢澤健*³・山下弘訓*³・菊地敬夫*²・岩出まゆみ*⁴

【要 旨】

本稿は学校法人昌平饗東日本国際大学エジプト考古学研究所による2018年の調査報告である。第2の太陽の船（現場主任：黒河内宏昌）、ダハシュール北遺跡（現場主任：矢澤健）、大ピラミッド探査（現場主任：山下弘訓）、王家の谷アメンヘテプ3世王墓（現場主任：菊地敬夫）の5つのプロジェクトが進行している。本稿はこれらの2018年の成果についてまとめ、最後にエジプト考古学研究所による事業報告（所長：岩出まゆみ）を付した。

【Abstract】

This paper reports the brief results of research project conducted in 2018 by Institute of Egyptian Archaeology, Higashi Nippon International University, Japan. Four projects are included in this article: Second Solarboat of Khufu (Field chief: Hiromasa Kurokochi), Dahshur North (Field chief: Ken Yazawa), Great Pyramid Scanning (Hirokuni Yamashita), Tomb of Amenhotep III (Field chief: Takao Kikuchi). The summary for the this year's results of these researches are provided below. The last chapter reports the activities of the Institute in 2018.

（1）はじめに（吉村作治）

エジプト考古学研究所の2018年度の調査研究について、以下個別にご報告させていただきます。振り返ってみますと、本学のエジプト考古学研究所は、1966年から始まった現早稲田大学エジプト学研究所の調査・研究の大半を引き継ぎ、現地調査と研究を続けてまいりました。この間幸運にも1年の途切れもなく日本学術振興会の科学研究費補助金を受け、自己資金を加えて続けてまいりました。現在エジプト国内には7カ所の調査地点を持ち、6カ所に現場主任を配し活動を続けています。7カ所とは、上エジプトでは①ルクソール西岸王家の谷西谷アメンヘテプ3世王墓の修復とその周辺の発掘、②ルクソール西岸クルナ村貴族墓です。下エジプトでは③ダハシュール北遺跡、④

アブ・シール南丘陵遺跡、⑤ギザ地区クフ王大ピラミッド南側に位置する第2の太陽の船発掘・修復・復原プロジェクト、⑥クフ王のピラミッド西側墓地の3D地下マップ作成とクフ王墓探査プロジェクト、⑦クフ王ピラミッドを宇宙線を使って3Dスキャンするというものです。

特に新しく始めた⑥と⑦はエジプト考古省の肝入りで期待が高まっています。その中でも宇宙線による大ピラミッドの内部探査は、私に考古大臣から直接電話で依頼があった事項です。事情は以下です。昨年度日本のN大学が宇宙線を用いて大ピラミッドをスキャンして、王の間の上部に小型飛行機が入るくらいの大きな空間を見つけたと言っているのです。N大の研究者はその結果をエジプト考古省内の専門委員会の許可なく科学雑誌「Nature」に発表し、エジプトでプレス発表をしたというのです。「空間発見」の内容も怪しいし、第一検証が行われていない。考古省内の科学委員会で議論されていない。挙句は考古省の許可なくプレス発表をしたということで、エジプトで大スキャンダルとなりました。そこで考古省は私に同じく宇宙線を使ってその結果を検証して欲しいと依頼がきたのです。私はまず本年(2018年)5月に下見のチームを出し、どのような方法でアプローチすればいいのかを考えました。九州大学、東京大学、千葉工業大学、東北大学との共同研究チームを発足させ、準備と機材の製作に取り掛かりました。この技術はクフ王墓探査プロジェクトでも応用できます。おそらく機材は今年中か来春には出来上がり、2019年4月以降に調査ができるものと考えています。検証チームは私たちだけでなく、エジプトのヘルワン大学を中心としたチームも加わり、国際的なものとなっています。2019年のエジプト考古学研究所は新しい調査で活気付くと思います。

以下は、2018年調査の各担当者による概要報告となります。

(2) 第2の太陽の船プロジェクト (黒河内宏昌)

このプロジェクトはカイロ・ギザ遺跡・クフ王ピラミッド南側の地中ピットに分解、収蔵されている木造船を取り上げ、保存修復し、組み立て復原を目指している。吉村作治学長のもと、日本とエジプトが共同で作業を進めており、2018年は独立行政法人国際協力機構(以下JICA)、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究A「古代エジプト・クフ王第2の船の復原に関する研究」)およびクラウドファンディング「人生最後の挑戦!ピラミッドの謎解明の鍵を握る太陽の船復原へ!」(代表:吉村作治)、READYFOR株式会社の資金で活動した。

具体的な現地での作業は以下の4つである。

- ①ピットからの部材の取り上げ
- ②取り上げた部材の保存修復
- ③保存修復を終えた部材の測量、図化、船の復原考察

④測量を終えた部材のGrand Egyptian Museum Conservation Center（大エジプト博物館保存修復センター、以下GEMCC）への移送

部材の取り上げは2019年度末までに終了する予定である。そして2022年には現在JICAの支援で建設中のGrand Egyptian Museum（大エジプト博物館）が全館オープンし、第2の船を展示する別館も竣工、組み立て復原を公開しながら行う計画である。

①部材の取り上げ

規模と構造のよく似た第1の船（現在ギザ遺跡の船博物館にて展示中）を参照した結果、第2の船もほぼ同数の約1200点の部材からできていると推測された。2018年9月末の時点で、それらのうち約900点の部材が取り上げられた。

クフ王の船は、部材を組み合わせて作られた木造船遺構の中では、とびぬけて世界最古である。船体の構造は極めて特徴的で、後世の船とは比較にならない長大な部材（最大で長さ23メートル！、幅40cm、厚さ14cm）を巧みに組み合わせてできている。これらの大型部材（全40点）の取り上げは1点につき約1週間を要するが（図1）、これまでに21点の取り上げを終了している。

この作業は高橋寿光氏（東日本国際大学エジプト考古学研究所客員講師）が中心となって行っている。



図1 部材取り上げの光景

②保存修復

部材は劣化が進んで脆弱となっており、破損や変形も見られる。ピットから取り上げる段階で、可逆性と可塑性のあるアクリル樹脂（パラロイドB72ほか）や和紙によるフェーシングなどの応急処理が施される。そして取り上げたのち、これ以上の崩壊を抑止するためのアクリル樹脂による強化、わかる範囲内での変形の矯正や破損個所の修復が行われる（図2）。2018年9月末の時点で、約860点の部材の保存修復が終了。復原考察が確定して当初の部材形状が厳密に明らかになったあと、第二段階の更なる強化や矯正を行う計画である。

この作業はアイーサ・ジダン氏（GEMCC, General Director）を中心として、リチャード・ジャスキ（保存修復家）、吉村佳南（同）、西坂朗子（東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授）、



図2 保存修復の光景

エジプト考古省所属の保存修復家たち（12名）が行っている。

③測量と組み立て復原考察

部材の測量のやり方としては、巻尺で寸法をとって図化する方法と、レーザースキャナーによる三次元測量を用いている。前者は詳細な観察をもとに部材の特徴を把握することができ、それをもとに船の復原考察を行う。後者は大型で複雑な部材の正確な形状を記録することができ、新たに開発するコンピューター上での組み立てシミュレーションシステムを用いて、マニュアル測量の復原考察を補完する計画である。2018年9月末の時点で、マニュアル測量は船の上部構造の復原を終了。三次元測量はクラウドファンディングの資金でレーザースキャナーを購入し（図3）、舷側板を中心とした船体部材のスキャニングに取り掛かっている。

マニュアル測量は柏木裕之氏（東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授）を中心として、山田綾乃氏（早稲田大学文学学術院助手）、ママドゥーフ・ター



図3 レーザースキャナーによる測量



図4 部材のGEMCCへの移送

ハ氏（Supervisor, Giza Inspectorate, Ministry of Antiquities）、エジプト考古省所属のインスペクター（2名）が行っている。三次元測量は大石岳史氏（東京大学生産技術研究所准教授）、影沢政隆氏（同助教）を中心に、東京大学生産技術研究所大石研究室の学生（2名）が行っている。

④GEMCCへの移送

保存修復または測量を終えた部材のうち8メートル以内のものは、GEMCCへ移送する（図4）。8メートルを超える部材はGEMCCの建物への搬入が寸法的に困難なため、現場で慎重に保管する。2018年9月末の時点で約690点の部材を現場から搬出している。

この作業は黒河内宏昌（前出）、アイーサ・ジダン（前出）が中心となって行っている。

なお国内では、6月18日（月）に第7回太陽の船シンポジウム「太陽の船を表現する」（於：早稲田大学小野記念講堂）を開催。JICA中東欧州部中東第一課課長竹下昌孝氏を来賓としてお招きし、吉村学長の基調講演、復原CG・模型製作で共同研究を行っている内山博子氏（女子美術大学教授）の発表を、満員の一般聴衆の方々に聞いていただいた。また「クフ王第2の船甲板—実測調査報告その2—」（柏木裕之、山田綾乃、『昌平エジプト考古学会紀要』第6号、2018年、pp.3～55）などの諸発表を行った。

(3) ダハシュール北遺跡プロジェクト (矢澤健)

ダハシュール北遺跡はカイロから南に約25km、ナイル川西岸の低位砂漠に位置しており、中王国時代(紀元前21～前17世紀)、新王国時代(紀元前16～前11世紀)に利用された墓地遺跡である。新王国時代の大型の神殿型貴族墓や、中王国時代の未盗掘墓がこれまでに発見されている。第25次となる2018年2月に行われた調査では、遺跡の北端部の発掘が実施された。

調査区の範囲は南北10m、東西20mであり、薄い細砂の表層を取り除いたところ、8基のシャフト墓の開口部が発見された。それぞれシャフト150から157と名付けられた。第25次調査では、この内5基の発掘を実施した(シャフト150、151、152、153、155)。遺構の特徴と出土遺物からシャフト150のみ新王国時代で、残りは中王国時代の墓と推測される。以下では、これまでのダハシュール北遺跡では見られなかった顕著な特徴を有するシャフト151について、発掘の成果を報告する。

シャフト151の開口部平面は南北2.1m、東西0.8mの長方形で、シャフト部の深さは6.1mであった(図5)。地下は、上から南側に埋葬室が掘削され(A室)、そのすぐ下の北側の面に別の埋葬室(B室)、最後にシャフト最下部から南側にもう1つ埋葬室(C室)が設けられていた。このような地下3階の構造は、本遺跡の中王国時代のシャフト墓では初めての例である。内部はすでに盗掘を受けており、埋葬は原形を留めていなかった。また、B室は隣接するシャフト150のシャフト部と接触しており、B室天井は大部分が失われていた。シャフト150は新王国時代のものであり、シャフト150掘削時にシャフト151B室へ繋がってしまったと考えられる。

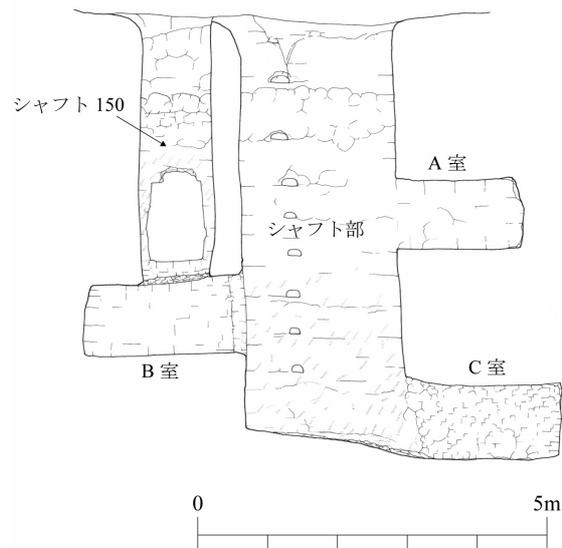


図5 シャフト151 立面図(東側)

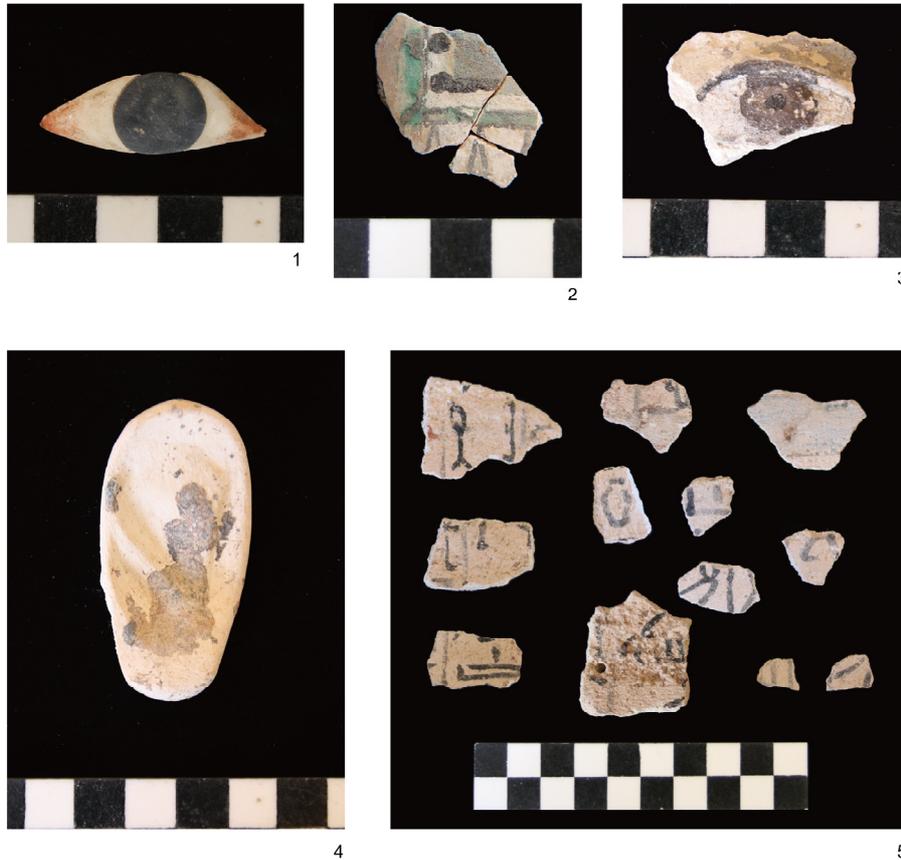


図6 シャフト151出土遺物

シャフト部からはミイラマスクまたは人型の木棺に使用された眼の形の象嵌が発見された(図6. 1)。A室からはミイラマスクまたは人型の木棺の一部と考えられる彩色プラスター片が出土した(図6. 2)。B室には木棺の最下部の木が残存していたが、極めて保存状況が悪く、形を留めた状態で取り上げることはできなかった。また、C室からは眼を描いたと思われるプラスター片(図6. 3)、プラスターで形作られた左の耳(図6. 4)、草書のヒエログリフが書かれた白色プラスターの断片群が発見された(図6. 5)。これらはおそらくどれもミイラマスクに属するものであり、草書のヒエログリフについても、ミイラマスクの正面下部に書かれた類例は散見される。

出土した土器群は、シャフト151の使用歴を明らかにする上で重要である。土器の年代は、墓の下部から発見された土器がより古く、上部から発見された土器は新しい傾向が観察された。この傾向は、最初に最下部のC室が作られ、次にB室、A室の順で作られた可能性を示している。B室の床面レベルは、C室の天井よりも約40cm高い位置にあり、A室の床面レベルは、同じくB室の天井よりも約40cm高い位置にあることも、これと関係している。墓は埋葬が行われた後、主に墓の岩盤掘削排

土（泥質の石灰岩であり、現代の言葉で「タフラ」と呼ばれている）で埋められたと考えられており、シャフト151も埋葬の度に埋められたと推測される。最初にC室で埋葬が行われた後、墓が埋められ、次に埋葬が行われる時に埋土は一旦取り除かれる。B室を掘削し、埋葬が行われるまでC室の埋葬が攪乱されることが無いように、C室前の埋土を残す高さで、B室の高さが計画されていたと考えられるのである。これは、B室の埋葬が完了し、次にA室の埋葬が必要になった時も同様である。

このような地下3階の墓は他遺跡で発見されているが、出土遺物や墓の構造上の特徴から利用過程が推測された例はこれまでになく、新しい成果と言える。

(4) 大ピラミッド探査プロジェクト（山下弘訓）

2017年秋、名古屋大学のチームが、Discovery of a big void in Khufu's Pyramid by observation of cosmic-ray muonsと題した論文をネイチャーに発表した。これによれば、大ピラミッド内部に未知の空間を発見したということである。その後、名古屋大学の調査成果をもとにNHKが『大ピラミッド 発見！謎の巨大空間』という特番を制作・放送し、大きな話題となった。しかしその後、調査結果についてエジプト政府から「これは新発見ではない」という趣旨の反論が出、論争が続いている。そのような状況の中、ほどなくして、エジプト政府から本学の吉村作治学長に「日本の技術を用いて名古屋大学が出した結果を検証してほしい」という依頼があり、この『大ピラミッド探査プロジェクト』が今年度より開始されることとなった。

本調査は、①ドローンと3次元レーザースキャナによる測量、②GPR（地中レーダー）による探査、③ミュオグラフィを用いた探査の3段階に分けて行われる予定である。

ドローンと3次元レーザースキャナによる測量は、有限会社タイプエスの設楽丘代表取締役を中心に、株式会社自律制御システム研究所（ACSL）が開発した純国産ドローンPF-1（図7）と、株式会社トプコンのGLS-2000（図8）を使用して、大ピラミッドの内部および外形の測量を精度数センチというレベルで行う。

GPRに関しては、千葉工業大学惑星探査研究センター千秋博紀上席研究員を筆頭に、東北大学東北アジア研究センター佐藤源之教授、東京大学大学院工学系研究科システム創成学専攻宮本英昭教授を中心としたチームで行う。従来のGPRは、垂直方向の探査が主要であったが、今回は対象がピラミッドであるために、レーダーの信号を送信する部分と受信する部分とを分割した新しいタイプのGPRを開発し、ピラミッドの水平方向のデータを取得できるようにした。周波数を変えながら探査を行う予定。

ミュオグラフィに関しては、九州大学大学院総合理工学研究院金政浩准教授を中心とするチームが計測器を本学との共同研究で開発し（図9）、探査を行う予定。



図7 ドローン PF-1



図8 三次元レーザースキャナ

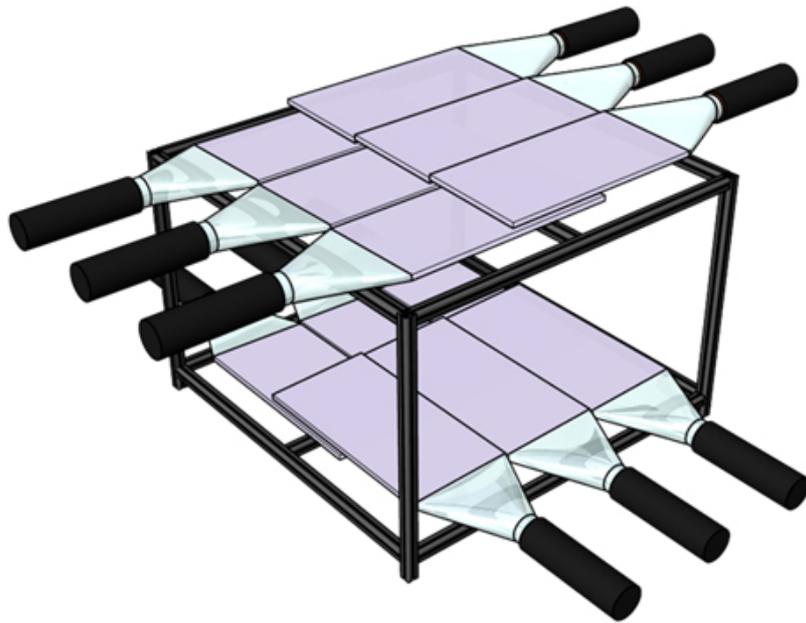


図9 ミュオン検出器のイメージ

本調査開始に先立ち、4月12日に隊員会議を行った。その後、本学エジプト考古学研究所山下弘訓客員准教授、設楽丘氏、千秋博紀氏、宮本英昭氏、金政浩氏の5名で、4月23日から5月4日の期間、予備調査を行った。

この期間で、測量についてはドローンの離発着場所と有効なデータを得るための飛行ルート、3次元レーザースキャナの設置場所などについておおよその見当をつけることができた。ミュオグラフィに関連しては、ギザ台地に点在する石灰岩を対象として、宇宙線ミュオンの減衰を大まかに測

定した。また、ダハシュールにある屈折ピラミッドでも同様の測定を行ったが、ピラミッド側からはほとんどミュオンが来ない、つまり、ピラミッドがきちんとミュオンを吸収していることを実験的に確認することができた。帰国後、そのデータをもとにシミュレーションを行った結果、ピラミッド内での実験計画を練ることができた。

その後、カイロ事務所と連絡を取り合い、9月にエジプトを訪れた際によく機材全般について通関手続きの見通しが立ったので、9月28日に主要メンバーでテレビ会議を行い、現状について情報を共有し、今後の調査に向けてどのように進めていくべきかについて協議を行った。

現在、通関手続きについて作業を進めており、最初にドローンと3次元レーザースキャナ、次に残りのGPRとミュオグラフィ関連の機材を送る予定である。調査は早ければ年内に開始し、2019年2月にはGPR、ミュオグラフィともに計測を始めようと考えている。

(5) 王家の谷アメンヘテプ3世王墓プロジェクト (菊地敬夫)

アメンヘテプ3世王墓は、古代エジプト新王国時代に王家の谷・西谷に造営された。王墓の入口は、谷底から緩やかに立ち上がる斜面に穿たれており、そこから地下に80mほど下ると、王の埋葬室に至るといふ大規模なものである。

この地下にある王墓の壁面と天井には、当時の荘厳な壁画がある。1799年にナポレオンのエジプト遠征に随行した技師によって発見され、ヒエログリフの解読者として著名なシャンポリオンが1829年に調査して、墓に埋葬されていたのがアメンヘテプ3世であると同定した。このように、アメンヘテプ3世王墓はエジプト考古学研究史においても重要な遺跡であり、本学のエジプト考古学研究所は、この王墓に残る壁画の修復とデジタル技術を用いた記録を進めている。

昨年度、休止となった本プロジェクトではあるが、2018年8月26日から9月9日にかけて、再び、王墓のデジタル記録にかかわる調査を実施することができた。この限られた期間での現地調査において、以下の2点を主要な目的とした。

- 1) 王墓の天井面のデジタル記録の手法の検証
- 2) 比較調査対象である王墓での天井碑文のデジタル撮影

王墓のデジタル記録にかかわる分野は、本学のエジプト考古学研究所が企画・統括して、東京工芸大学の画像工学の専門家と協同して進めている。今回も東京工芸大学から2名の共同研究者に参加いただいた。なお、調査チームは、これまでアメンヘテプ3世王墓の埋葬室の壁面に描かれているアマドゥアト書と呼ばれる図像とテキストからなる装飾のデジタル記録を行ってきた。今後、この技術を活用して、王墓の天井面の記録手法を確立したい。

今回の調査では、アメンヘテプ3世王墓のC室の天井を試験的にデジタル撮影した(図10)。C室



図10 アメンヘテプ3世王墓C室天井（一部）のパノラマ接合写真

の床は、下降する階段となっており、天井をデジタル撮影する際には、非常に困難な作業環境である。このような環境で試験的にMicrosoft Kinectを測量機材として活用し、また、測量補正に用いるレーザー・パターンを天井面に投影しながらデジタル撮影を行った（図11）。今後、撮影画像と測量データを組み合わせることで、取得したデジタル画像をより精度を高めて加工・接合できると考えている。

また、天井面の撮影には、従来通り、デジタル一眼レフカメラを一地点に固定し、その位置でカメラを回転させることで天井面を撮影した。使用したカメラとレンズは以下のとおりである。

デジタル一眼レフカメラ：Canon EOS 5DsR（5060万画素）

撮影レンズ：Canon EF 35mm F22

これらの機材を、固定点で360°回転して撮影することができる自動パノラマ撮影システムに装着して天井面を撮影している。取得できたデジタル画像は、画像接合ソフトPTGuiを利用して接合することができる。上述のように、今後、撮影の際に測量したデータを用いて、この接合画像の精度を確認し、画像の接合結果を改善していく予定である。

撮影で利用した照明は、LEDの小光源を約75cmのスティック状のものに複数組み込み、このスティックを床に並べて設置して天井面を照らした。その結果、光源が分散されることで、撮影機材の影が天井面に生じることが無く、良好な撮影画像を得ることができた。なお、使用したLED照明は紫外線と赤外線を発しないので、撮影対象に対する影響も従来の照明と比較して軽減されていると考えられる。



図11 接合補正のためにレーザー・パターンを投影して撮影した
アメンヘテプ3世王墓C室天井（一部）のパノラマ接合写真

次に、アメンヘテプ3世王墓プロジェクトの比較調査として実施している王家の谷の王墓に施されている天井碑文の記録について簡潔に述べる。

アメンヘテプ3世王墓の埋葬室にあるアムドゥアト書とともに、王家の谷の王墓に記された宗教文書のひとつに天井碑文がある。この名称は、セティ1世王墓以降、この宗教テキストが王墓の天井に書かれていることに拠っている。

今期の調査では、天井碑文をセティ1世王墓、メルエンプタハ王墓、セティ2世王墓、シプタハ王墓、ラメセス3世王墓でデジタル撮影した。これらの王墓での撮影は、アメンヘテプ3世王墓とことなり、撮影環境が制限されていた。とりわけ、これらの王墓は、いずれも一般の観光客に公開されており、アメンヘテプ3世王墓でデジタル撮影に利用する機材をすべて持ち込み、使用することはできなかった。したがって、自動パノラマ撮影装置やLED照明は、今回の撮影に際して利用していない。

今後、このような条件下で得られた撮影画像について検証を進めて、王家の谷の王墓に施されている装飾を、デジタル記録として資料化していくための不可欠な要素、また許容される精度的な誤差などを明確にしていくことを課題として設定することができた。今回の調査で得られた各王墓に施されている天井碑文の高精細デジタル画像が、その基礎資料となる（図12）。



図12 メルエンプタハ王墓の天井碑文（一部）のデジタル画像

(6) 事業報告（岩出まゆみ）

2018年の事業活動は以下です。

①第1回エジプト視察ツアーの実施（図13）

本学エジプト考古学研究所の企画で、太陽の船発掘現場を訪ねる特別なエジプト8日間のツアー『東日本国際大学エジプト考古学研究所協力「太陽の船 発掘現場」特別見学 ナイル川クルーズとエジプト周遊8日間』（2月17日～24日）が行われました。東日本国際大学が連携をしている福島民報社が協力し、新聞社から記者が同行し、随時取材を進めながらリアルタイムで報道していきました。連日、紙面には記事が掲載され、大きな反響がありました。参加者も約40名を数え、現地では黒河内宏昌先生のレクチャー、吉村作治学長によるサッカラの遺跡での解説、太陽の船発掘現場での解説も行われました。（主催：JTBコーポレートセールス）

②ダハシュール北遺跡の発掘調査

ダハシュール北遺跡第25次調査が2018年2月に実施されました。今回の調査は遺跡の北端部の発掘が行われました。（日本学術振興会科学研究費補助金、基礎研究（A）「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学術的研究」（研究代表者：吉村作治、課題番号：26257010）



図 13 第 1 回エジプト視察ツアーの様子（ギザ・第 2 の太陽の船発掘現場にて）

③大ピラミッド探査プロジェクト 予備調査実施

新たにエジプト考古省からの吉村作治学長への依頼を受け、企画されたプロジェクトで、準備が開始されました。機材の開発も必要なため、プロジェクトの開始はまだ先になるが、その予備調査を実施しました。（4月23日～5月4日）

各分野のご担当の先生方に実際の現場を視察頂く機会を持つことが出来たので、今後の調査をより効率的に進められると考えております。

④新組織「ピラミッドクラブ」創立記念のプレ研究例会を開催

5月23日（水）の18：00～19：00、東日本国際大学学食で、2月のエジプト視察ツアーに参加した方々を特別隊員として認定し、その後、懇親会を開催しました。今後は、特別隊員として研鑽を深め、様々なエジプト関連の研究会や催しに参加するというお話が出ました。これから古代エジプト文明と一緒に学んでいくメンバーを上手にまとめていきたいと考えています。

⑤シンポジウム「第7回太陽の船シンポジウム～太陽の船を表現する～」開催

6月18日（月）の18：30～20：00、今回で7回目を迎えるシンポジウムが、早稲田大学小野記念講堂で行われました。参加者が会場の約200名の定員を超え、会場に入りきれなかった為、急遽、ロビーにモニターを用意して聴講頂きました。

⑥「第3回エジプト公開研究発表会」開催

本年度で3回目となる研究会が、7月5日（木）16：00～17：30、東日本国際大学1号館階段教室で行われました。テーマは、新しく立ち上げた大ピラミッド探査プロジェクトについてのパネルトークが行われ、たいへん興味深い内容の研究会となりました。

⑦記者発表会実施

第3回公開研究発表会に先立ち、7月5日15：00～15：30、大ピラミッド探査プロジェクトに関する覚書の締結のための調印式が執り行われ、その後、1号館階段教室で、記者会見が行われました。多くのマスコミも出席して下さいまして、新聞でも取り上げて頂きました。

⑧王家の谷西谷アメンヘテプ3世王墓プロジェクト

今年度は8月26日から9月9日にかけて、王墓のデジタル記録のための調査が行われました。この調査は東京工芸大学の画像工学の専門家と共同で進めています。

⑨企画展「色を探検する」開催（図14）

王家の谷プロジェクトの成果を発表するイベント『色を探検する』が東京工芸大学のカラボギャラリーで2018年9月15日～2019年4月19日の会期で始まりました。会場には実寸大で、アメンヘテ



図14 東京工芸大学カラボギャラリー企画展「色を探検する」チラシ

プ3世王墓の壁画が高度印刷技術で再現され、展示されています。10月6日（土）には吉村作治学長のオープニング記念講演「古代エジプトの壁画の色彩」が本厚木キャンパスで開催されました。

⑩鎌山祭における展示と講演会

東日本国際大学1号館101教室では、10月27日（土）、28日（日）の2日間にわたって、例年と同様に展示会が開催されました。

今年は「エジプト博物館構想 バーチャルとリアルの融合」と題して展示を行いました。また28日13:30～15:00、東日本国際大学1号館階段教室で、吉村作治学長の講演会「科学で探るピラミッドの謎」が開催され、好評を博しました。会場には書籍とエジプトグッズ販売コーナー、来年2月実施予定の第2回エジプト・トラベルスタディ受付のコーナーが設置され、賑わいました。



図 15 第 45 回鎌山祭チラシ

⑪シンポジウム「エジプト・フォーラム27」開催

今年で27回目となる、シンポジウム、「エジプト・フォーラム」が、11月25日（日）15:00～17:30、早稲田にある大隈大講堂で開催されました。テーマは「大ピラミッド探査プロジェクト」で、調査に関わる専門の先生方に御登壇頂きました。

⑫テレビ番組協力

吉村学長が監修協力をした「たけしの新・世界七不思議大百科第6巻」「テレビ東京」が12月に放

送されました。ピラミッド・ミステリーを取り上げ、ギザのクフ王墓探査プロジェクトの発掘現場の撮影協力を行いました。

⑬第2の太陽の船プロジェクト

クフ王第2の太陽の船の保存・修復・復元プロジェクトは今年も、通年、継続されました。昨年、クラウド・ファンディングで購入したレーザースキャナーによる三次元測量も順調に継続されています。(日本学術振興会科学研究費補助金、基礎研究(A)「古代エジプト・クフ王第2の太陽の船の復原に関する研究」(研究代表者：黒河内宏昌、課題番号：26257309)、独立行政法人国際協力機構(JICA)「大エジプト博物館建設事業実施促進支援業務(第二の太陽の船復原に係る技術支援)」)。

註

- * 1 東日本国際大学学長・教授
- * 2 東日本国際大学エジプト考古学研究所教授
- * 3 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授
- * 4 東日本国際大学エジプト考古学研究所所長・客員教授

